

久保忠行著

『難民の人類学——タイ・ビルマ国境のカレンニー難民の移動と定住——』

清水弘文堂書房 2014年 345 + xi ページ

いし い ゆ か
石 井 由 香

I 本書の問題意識

本書は、タイ北西部、ビルマ^(注1)に隣接するメーホンソーン県の難民キャンプに居住する、もしくは居住の経験をもつカレンニー（赤カレン）難民の状況について、人類学的分析を試みた著作である。難民の多くはビルマのカヤー州出身である。本書の内容は2004年から2013年までの約10年の間に、著者がタイ、ビルマ、米国で行った現地調査の結果に基づいており、著者が2011年3月に神戸大学で受理された博士論文に大幅な加筆・修正を加えたものである。

国際移民の分類において、難民（および庇護希望者）は重要なカテゴリーのひとつである。国際移民の移動・居住過程の「管理（management）」は、国際社会において近年特に重視されるようになっており、難民の移動・定住過程に関してもさまざまなアクターの連携による支援、庇護に大きな関心が寄せられている。ただし、難民に関する「管理」は、いわゆる「移民」のそれとは異なる性質をもつ。第二次世界大戦後の国際移民の多くは自発的な意思に基づく移動であると考えられるのに対し、難民はしばしば強制移民という性質もっている。また、難民は弱い立場にあり、国際社会において人道的に支援され、庇護されるべき人びとであると位置づけられる。難民の場合、支援に関わるのはUNHCR（国連難民高等弁務官事務所）を始めとする国際機関、国際NGOなどであり、こうした国際支援機関による難民支援と保護体制は国際難民レジームと呼ばれる。この国際難民レジームの対象となる難民は、必

然的に脆弱な人びとという「難民性（refugeeness）」をもつことになる。弱者であるからこそ支援、庇護が正当化される。

一方、難民の脆弱性は支援する側から付与されるるところにとどまるものなのか。難民はまた主体的な存在であり、国際難民レジームや自らを取り巻く政治・経済・社会状況を解釈し、レジームを「利用」することで自らの生き残りを図ろうとする存在ではないか。しかし、国際難民レジームの担い手の側、管理する側からの分析では、難民の主体性は十分にとらえられない。本書はこうした問題意識に基づき、人類学的な手法により難民がいかに自らをとりまく状況に働きかけているのかを明らかにしようとする。「難民の脆弱性と主体的営為の相互構築的な側面」（35ページ）を分析する、徹底して人類学的方法による難民研究という点は、本書の第1の重要な特徴であり、長期調査に基づく確かな実証と併せて高く評価されるべきであろう。

II 長期化する難民状態の分析枠組みと事例のもつ普遍性

本書の第2の重要な特徴として、長期化する難民状態に関する分析枠組みの提示がある。難民の多くは年単位の難民状態を経験しており、国際難民レジームも一時的・短期的存在としての対応から長期的視野に立った対応を迫られている。著者は、人類学の分析概念において、難民状態は国家から排除された難民が国家に再統合される前段階の〈過渡〉の移行期であるとし、「通過儀礼にみられる〈分離〉〈過渡〉〈再統合〉の図式のアナロジーとして、国を離れるプロセスとしての〈分離〉、難民状態としての〈過渡〉、そして再び国家に包摂される〈再統合〉として状態の移行を」（10ページ）、複数の国境を越え、国際的支援を受ける難民が生きる世界の複合的な状況としてとらえている。〈再統合〉においては、UNHCRの長期化した難民問題の解決策である第三国定住、避難先の地域社会への統合、難民の自主的な帰還、の3つの解決策に沿い、それぞれのケースについて検討を行っている。こうした検討は、難民問題の解決策の評価にもつながるものである。

本書の構成も、この枠組みに沿った3部構成がと

られている。第1部「分離——越境する難民——」では、第1章「難民研究の視座」で著者の問題意識、第2章「紛争と難民の越境」でカレンニー難民の出身国であるビルマの内戦史と難民キャンプ形成の歴史のプロセス、第3章「難民キャンプという社会空間」で難民の過渡的な状況を作り出す受入国タイの難民政策とキャンプの管理体制が述べられる。第2部「過渡——難民として生きる——」においては、第4章「難民の生活世界」で難民の衣食住、難民キャンプの周辺村、メディア、海外に移住した友人・親族との携帯電話を通じた情報交流、社会関係を、第5章「故郷とのつながり」で難民キャンプにおけるカレンニーの「伝統文化」としての祭りの復興と伝統の「創造」にみる出身のカヤー州とのつながりを、第6章「難民の帰属意識」で「カレンニー」というアイデンティティ自体の政治的構築性を、武装闘争における主張、カレンニー語制定の過程、難民キャンプ内の高校の歴史教育の分析から叙述している。第3部「再統合——国民国家のなかの難民——」では、第7章「庇護国で暮らす難民」でカレンニーの構成員でありタイで「首長族」として観光村で定住するようになったカヤンの人びとの状況を、第8章「第三国への再定住」で難民キャンプから米国への移動・定住の過程と難民キャンプでの生活スタイルを残した集住状況を、第9章「難民帰還の可能性」でビルマにおける「民政移管」と停戦交渉の影響を分析している。結語「難民の移動と定住」ではこれまでの記述がまとめられ、人類学的難民研究の特徴として難民の社会関係に着目したこと、＜過渡＞は難民の定住ではなく難民キャンプへの「定地」であること、＜再統合＞が＜過渡＞との連続性の上で、難民キャンプとの関わりをもちつつ行われることを改めて強調している。

国際移民研究、エスニシティ研究の観点からも、特に＜過渡＞＜再統合＞の状況に関しては興味深い指摘が行われている。＜過渡＞の場である難民キャンプは決して閉じた空間ではない。難民キャンプはUNHCR、国際NGO、庇護国タイという複数の外部アクターが関わる場である。周辺村・市とは物資の流通、季節労働者としての労働関係がある。短波ラジオ、ビルマ語とカレンニー語の新聞、インターネット、携帯電話といったコミュニケーション手段は、タイのみならず出身地、海外の情報を随時得る

ことを可能にしている。第三国定住で海外に移住した人びとからは情報と送金が寄せられる。カレンニー難民はまさにグローバル化時代の難民状況を体現している人びとであるともいえよう。こうしたボーダレスな人、モノ、カネ、情報の移動と社会関係のなかで、カレンニー難民は状況に応じて自らが置かれた政治社会的条件を判断し、「利用」し、カレンニーとしての民族意識を動員することで生き残りを図っている。

また、＜再統合＞では、庇護国タイにおいて観光上の「見世物」としての価値をもつとタイ側から見なされるカヤンの人びとが、単に搾取されるだけではなく、自文化の観光的価値を認識しながらタイにおける居住や第三国定住を勝ち取る営みがある。ここではカヤンの人びとの自文化の行使に対する選択が明示されており、文化の正統性（authenticity）と当事者の主体性という点を考えさせる。米国における第三国定住では、カレンニー難民は集住し、難民キャンプと似た生活をするにより、米国での生活を成り立たせようとしている。移民が新しい土地で生活する場合、同郷の人びとが集住し、ホスト社会から独立した経済圏であるエスニック・エンクレーブ（ethnic enclave）を形成し、エスニック・ネットワークと互酬性をもとに生きやすさを求めるというあり方は、米国のキューバ難民などのヒスパニックや華僑・華人などアジア系移民の事例研究から明らかにされているところである^(注2)。カレンニー難民の場合、独立した経済圏を作れるような階層的多様性があるわけではなく、この意味でやはり弱者であるが、先住のラオス出身のモン難民の経験や、難民キャンプという組織のあり方、ネットワークを活用しながらホスト社会での居住を確かにしようとする、いわば難民キャンプ資源を動員しようとしている点は、著者も「移動形態の移民化」（298ページ）という言葉で示しているように、移民のエスニシティの動員との比較からも興味深い。

カレンニー難民の状況に関する著者の観察は日常生活レベルの詳細なものであり、その内容は多岐にわたる。観察した事実のみに拘泥すれば、1マイノリティの特殊な事例の記述にとどまるであろう。しかし、カレンニー難民は＜分離＞＜過渡＞＜再統合＞のプロセスを体現しており、難民として普遍的な特徴をもつ人びとであることが本書の叙述から浮

き彫りにされる。また、難民の増加とグローバル化により、かならずしも難民受け入れを積極的に行う意図をもたない国、これまでならば考えられなかった国・地域における居住の長期化が起こっている。タイは難民条約未批准国であり、難民の定住国ではないが、難民キャンプを設置し長期の難民の〈過渡〉の状況を生み出しており、この点でも本書でとりあげたカレンニー難民の事例は、他の難民状態が長期化する、また難民キャンプに長期に居住する難民の状況の分析に際して応用可能性をもつ内容となっている。難民の「主体性」がどのような場で発揮されるのか、それを明らかにすることにも成功しているといえよう。

Ⅲ 本書への問い

これまで述べたように、本書の考察は緻密な調査に基づき、多岐にわたる充実したものである。しかしながら、本書を通読して、評者が疑問に思う部分、さらなる説明があればと感じる部分もあった。ここでは3点に絞って述べてみたい。

第1の点は、『難民であること』と『民族であること』の不可分性(191ページ)についてである。著者は、カレンニーという名乗りは、政治的に構築されたものだとの見方を提示している。そして、ナショナリスト・エリートが構築したラベルを、一般の人びとがどう受容しているのかに焦点をあてている。カレンニーの人びとは多民族からなり、文化的にも多様であるが、マジョリティであるカヤーの文化がカレンニーの「伝統」文化の復興においては中心となる。難民キャンプにおいて、さらに対外的な文脈において、難民として庇護を受けるために、また自己肯定のために、カレンニーという名乗りは有用であり、カヤー語、カヤーの文化をカレンニーの文化とすることを非カヤーの人びとが受け入れることにも動機づけがある。この意味で「難民であること」とカレンニーという「民族であること」は著者の説明の通り不可分である。

しかし、カレンニー語を話すことはできても、読み書きができる人はそれほど多くない。また、難民キャンプ内の高校の歴史教材であるカレンニーの歴史についての教科書では、ナショナリスト・エリートによるプロパガンダを教えるのではなく、生徒に

独立や自治、カレンニーの民族内部の文化的多様性、差異と共存について考えさせようとしているという。こうした記述を読む限りにおいて、一般のカレンニーの人びとにとって、カレンニーの民族としての「ラベル」が一定の場面において意味があるとしても、民族としての「文化」の内実は何で、どこまで帰属意識と結びつく形で「共有」されているのか、という疑問をもった。カヤーの文化にとどまらない、「カレンニー民族としての文化の内容」は、多様性という表現を越えてどのようなものなのか。難民の主体性は、文化の内実を構築し、共有するという点ではどのように発揮されているのだろうか。特に、長期化する難民状況のなかで、世代間格差も顕在化しているであろう状況下において、たとえば若い世代がどのようにカレンニーとしての文化への理解をもっているのかという点について、歴史教育を学ぶ生徒や教師の意見、その教科書の作成意図など、もう少し説明があれば、一般の人びとにとってのカレンニーという民族意識の自称性が、より浮き彫りにされたのではないだろうか。

また、「カレンニー」は難民性と結びつくものとして生成しているという。では、難民でなくなればカレンニーというラベルは必要なくなるのか。エスニシティ研究において、構造・手段主義的アプローチでは、エスニシティはそれを活性化させる政治・経済・社会状況が解消されれば弱まる、という解釈がある^(注3)。〈再統合〉において、カレンニーという民族の名乗りはどのような意味をもつのか。第三国定住の米国では、カレンニー難民は支援の対象としては「ビルマ難民」であるが、生活においては難民キャンプとのつながりや故地の祭りの復興、教会でのネットワークを通じてカレンニーを意識する様相がみられる。加えて、難民帰還の可能性の検討における、ビルマ国内でのカレンニーという呼称の使用に関する指摘も興味深い。2010年の民政移管後、カレンニーの反政府組織KNPP(カレンニー民族進歩党)とビルマ政府の間で戦闘停止の合意が行われ、依然として帰還は厳しい状況ではあるものの、その可能性が検討されている。戦闘停止にともない、ビルマ国内でカレンニーという呼称の使用が認められるようになったことは最大の変化であり、そこでは民族の言葉として、難民キャンプで教えられてきた「カレンニー文字」がカヤー州の公式文字

表記のひとつとして認可された。ただし、「カレンニー語」ではなくカヤー民族の言語、「公式カヤー文字」として認可されたということであり、カレンニーの他称性とカヤーの自称性が再度問われる状況がそこには生まれているという。このことを、著者は「『民族』紛争後の和解のひとつのあり方なのかもしれない」(323ページ)ととらえているが、カレンニーと不可分のものとされる難民性から解消される動きとしても考えることができるものなのか。さらに、政治的エリートではない人びとにとって、カレンニー(カヤー)文化の内実はどうなような帰属意識と結びついていくのか。カレンニーという「弱者のラベル」と文化の国民国家への再統合にともなう今後についても、著者の意見をさらに読みたく思った。

第2の点は、<再統合>と難民の「自律」の評価についてである。著者は、UNHCRの長期化した難民状況の3つの解決策に即し、<再統合>の現状を考察している。帰還についてはビルマ国内の政治情勢の今後をみていく必要があるが、避難先の地域社会への統合、第三国定住については、本書の記述からも、カレンニー難民が厳しい状況に置かれていることがうかがえる。タイ国内のカヤンは、搾取されるだけではなく自ら状況を変えようとする人びとの姿が描かれる一方で、少数民族観光の対象としての利用価値があるからこそ難民キャンプ外で居住することが可能な人びとであることもまた事実である。米国での第三国定住でも、多くの人びとは非熟練単純労働に従事しており、経済的に決して恵まれた状況にはない。こうした状況から、カレンニー難民の生活にはどのような展望を見出すことができるのか。定住先において結局は下層にとどまり、不安定な雇用状況や恵まれない経済状態が再生産されるような状況が生み出されているのではないか。自分らしく生きるために自ら意思決定できるという意味での「自律」、支援制度では媒介されない関係性に基づく「自律」(298~299ページ)が本書のおもな分析対象であり、弱い立場にある難民の「自律」にはおのずから限定があることは十分理解した上で、<再統合>を評価するにあたっては、定住先の社会における難民の中長期的な階層的な位置づけ、生活の見通しから「自律」の可能性と限界を考察する必要もあるのではないかと考えた。

第3の点は、難民と移民労働者の比較についてである。タイは移民労働者の受入国であり、ビルマからの移民労働者は数の上でもっとも多い。非合法で働くビルマ人移民労働者に対し、タイ政府は1992年以降の閣議決定による「半合法的」受け入れから2000年代の移民労働者の合法的受け入れ、「半合法」移民労働者の「合法化」へと制度整備を進めたが、合法化手続きをとらない人びとも多く、そのなかには少数民族出身者が含まれていた。一方、ビルマの民政移管にともない、ビルマ政府が自国民の海外就労を管理しようとする動きもみられる[山田2014]。タイとビルマの間には難民と移民労働者の越境移動の2つの流れがあり、移民労働者も不安定な法的地位、労働条件の下で、タイに相対的に長期に居住する状況がある。タイとビルマ両政府の難民と移民労働者への対応には、どういった共通点や相違点があるのか。また何らかの連動性があるのだろうか。さらに、カレンニー難民と移民労働者の就労・生活、タイ社会からの反応に関してはどうだろうか。難民固有の状況を明らかにし、タイという「定地」先の性質を考える上でも、移民労働者との比較は有効性をもつところがあるのではないだろうか。

本書の分析は著者が意図した内容を十分に達成していると考えられる。その上で、さらに国際移民研究、エスニシティ研究の観点から3点の指摘を行った。しかし、これらは本書の価値を損なうものではまったくない。本書はグローバル化時代の難民像を理解する上で、非常に有効な視点と内容をもっている。難民、国際移民に関心をもつ方々に一読を強く勧めたい。

(注1) 難民出身国の呼称については、本書の表記にならう。

(注2) エスニック・エンクレイブについては、米国の社会学者アレハンドロ・ボルテスらによる研究が著名であり、多くの調査研究が行われている。先駆的な著作としてPortes and Bach [1985]を参照。

(注3) エスニシティ研究における構造・手段主義的アプローチについては、関根 [1994, 119-164]による要約・解説がわかりやすい。

文献リスト

<日本語文献>

- 関根政美 1994. 『エスニシティの政治社会学——民族紛争の制度化のために——』名古屋大学出版会.
- 山田美和 2014. 「タイにおける移民労働者受け入れ政策の現状と課題——メコン地域の中心として——」山田美和編『東アジアにおける移民労働者の法制度——送出国と受入国の共通基盤の構築に向けて——』アジア経済研究所.

<英語文献>

- Portes, Alejandro and Robert L. Bach 1985. *Latin Journey: Cuban and Mexican Immigrants in the United States*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.

(静岡県立大学国際関係学部教授)